

# 江津湖を生かした都市デザインで熊本のひとを創る

ロングライフデザインプロジェクト熊本

片岡恵一郎<sup>1</sup>・眞原賢一郎<sup>2</sup>・面木 健<sup>3</sup>・ミヤザキオリエ<sup>4</sup>・谷脇俊之<sup>5</sup>

<sup>1</sup>小国公立病院 医師・<sup>2</sup>熊本市役所 職員

<sup>3</sup>上通りOMOKIビルオーナー・<sup>4</sup>デザイナー・<sup>5</sup>フォトグラファー

水の都、熊本市のほこるべき湧水湖である江津湖。市街地からほど近い場所に、これほどの美しい湧水が湖を作っているのは全国的にも稀である。我々は、この素晴らしい資源を熊本のまちづくりにもっと生かすべきだと考える。

今回、アンケートや関係者ヒアリングなどの調査を元に、政令指定都市として、江津湖の魅力を効果的に引き出す都市デザインを検討し、熊本城、水前寺公園、熊本市電などとリンクさせて、政策として提案する。

## 1. 提案理由（課題と目的）

江津湖は、市街地からほど近い位置にある自然豊かな湧水湖である。熊本市民にとって江津湖は身近な憩いの場であり、地下水都市熊本を象徴するスポットである。我々は江津湖のような、熊本に根付いた熊本らしいスポットやモノを発掘し、世の中にアピールしていくことが、熊本のまちづくりにつながると考えている。近年リーマンショックや東日本大震災を経るなかで、経済の豊かさの重視から人間性の豊かさの重視への意識の転換が求められている。東日本大震災後初の政令指定都市となった熊本市において、都市内の優れた自然環境である江津湖を通じて、新しい時代の地域に根付く熊本らしさを大事にする人が創られることは、とても重要なことである。しかし、外来生物などによって江津湖の自然環境は悪化の傾向にあり、また憩いの場としての市民の利用は限定的なものに感じられる。それらの課題の解決に向けて、デザイナーナガオカケンメイ氏が提唱している「その土地に根付いた、息の長い、その土地らしいデザイン」という主張に共感する市民の自主的な集まりである団体「ロングライフデザインプロジェクト熊本」が、江津湖の持つ可能性を引き出すデザインを考え、政策として提案をするものである。

## 2. 江津湖について

江津湖についての政策提案するにあたって、江津湖がどのような湖なのか踏まえる必要があるため、調査内容説明の前に、江津湖の特徴を提示しておく。

### (1) 江津湖の成り立ち

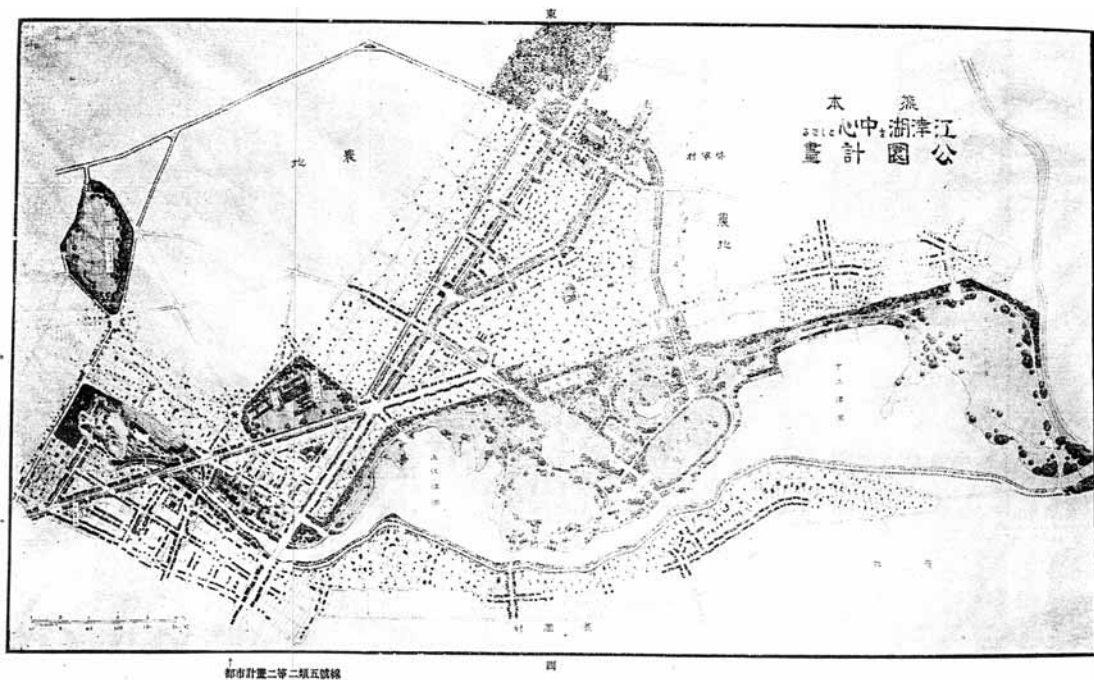
江津湖はもともと湧水の豊富な沼状の湿地帯であり、縄文時代から湧水が利用されていたとみられる。特に上ノ原遺跡では炭化した米が発見され、日本の稲作文化の始まりの場所として注目されている。

その後、現在のように、水道の発達していなかった時代には、人々は湧水または手掘りの井戸で得られる浅層地下水を利用していた。よって、湧水の豊富な江津湖の近くに肥後国の国府が置かれたと推察されている。この国府という町名の起源は、古く奈良時

代に遡るものである。

また、江津塘は、加藤清正によって構築されたと言われている。この堤防によって、西南方面に流出していた豊富な湧き水は堰きとめられて、元の湖の面積よりかなり拡大され、現在の広さに到った。

そして、江津湖が“水前寺江津湖公園”として整備されることになった契機は、1930年代に内務省の技師であった北村氏が来熊した際、当時の熊本市長に対し、この地を「市民永久の憩楽保存地」として計画提案したことである。その内容は「単なる公園の提案ではなく、熊本市に公園の系統、この当時アメリカの先進都市で注目されていたパークシステムという環境共生型都市計画をこの地区に提案した」<sup>1)</sup>のものであった。



図一 都市公論誌上 1930（昭和5）年 北村徳太郎

## (2) 江津湖の形状と位置と特徴

江津湖は長さ2.5km、周囲6km、湖水面の面積約50ヘクタールで、ひょうたん型をしており、その形態から上江津湖と下江津湖に大別される。上江津湖は、上流域のような水流があり、川幅も狭く、川岸近くまで森林が迫る部分もあるが、下江津湖は、川幅が広く両岸が開けた環境となって、水の流れは緩やかになり、湖のような状況を呈している。

熊本市の東部にあって、秋津川、木山川、矢形川と合流し、熊本平野を西流す加勢川の河川膨張湖である。熊本市街地にある都市公園でありながら、1日約40万トンの清らかな湧水が湧き出す全国でも有数の湿地であり、自然公園としての価値も高い。

なお、江津湖は平成13年に環境省により「日本の重要湿地500」に選定され、水前寺江津湖湧水群として、平成20年に「平成の名水百選」に認定されている。

### (3) 江津湖の自然環境

江津湖はその特徴である湧水によって、四季を通じて水温の変化が小さく、年平均18℃前後を保っている場所が多い。また、流水と止水をあわせもつと共に、湖底は岩、砂礫、泥と変化に富んだ環境であるため、そこに生息する動植物はたいへん豊かである。

現代の江津湖の自然に大きな変化をもたらしたのは、昭和28年の大水害と、その後のたび重なる集中豪雨によって、大量の土砂が流入し、水深は浅くなり、沼沢化と陸地化が進行していったことである。また、江津湖周辺の都市化に伴う地下水利用の増加による水位の低下や生活排水の流入、河川工事、公園化などによる水質汚濁と湖岸の環境変化が進んだ。その結果、数十年前と比べると、江津湖全域の自然環境が著しく損なわれている<sup>2)</sup>。

### (4) 江津湖の生物

水草は上江津湖も下江津湖も種類、量ともに多い。流れのある水中には、ヒラモやササバモなどの在来の希少な水草の他、外来種も多く繁茂している。

鳥類では、年間を通して16日46科200種が確認されている。越冬期に見られる冬鳥であるカモ類などの水鳥の他にも、森林性の留鳥が生息し、旅鳥たちが渡りの中継地として利用する。市街地に隣接する場所で、このように多種多様な鳥たちを観察できる場所は少なく、大変貴重である。

魚類は、平成23年度の熊本市の調査で、約49種の魚類が確認されている。生息数が増加している魚類は、オオクチバスやブルーギルなど計8種で、水質汚染に強く繁殖力の強い魚類である。逆に生息数が減少している魚類は、イナモンジタナゴやニッポンバラタナゴなど計27種。要因としては、水質汚染、河川改修による生息域の破壊、外来種の影響等があげられている。

この他、ホタル、36種のトンボなどの昆虫や、準絶滅危惧種に選定されているカヤネズミなどの哺乳類も見られる。また両生類ではトノサマガエルが見られなくなり、外来生物法規制対象種であるウシガエルなどが見られている。

植物については、同じく平成23年度の熊本市の調査で、328種が確認されている。昭和61年頃の文献<sup>3)</sup>では、約400種の植物とされていることから、以前と比べて植物の種類が大きく減少しているものと思われる。同調査で、絶滅の危惧がある植物の生息地がさらに激減していることも判明した。その要因としては、オオカナダモなどの特定外来種の影響とともに、人間活動による水環境悪化という人的要因がある。

## 3. アンケート調査以外の当団体による江津湖フェスタでの事業内容

### (1) 江津湖フェスタについて

政令指定都市誕生記念事業として、水の国熊本の象徴である江津湖一体を会場に、環境や健康づくり、文化やスポーツといった新しいスタイルの市民協働型のイベントを1ヶ月間実施し、政令指定都市移行のお祝いムードを盛り上げるとともに、日本一の地下水都市くまもとのイメージを広くアピールするものである。

内容としては、環境フェアや食と健康フェアなど、市主催の事業（平成24年度13件）を実施するとともに、TKUやNPO法人など民間主催の事業（平成24年度34件）の実施



を認め、市主催の事業とともに広報等を行い、総合的なイベントとするものである。ロングライフデザインプロジェクト熊本も、民間団体として江津湖フェスタに参加した。

## (2) 熊本のロングライフデザインの紹介

「ロングライフデザイン」とは、「その土地に根付いた、息の長い、その土地らしいデザイン」のことである。熊本市内において、そのコンセプトに合う観光地やレストラン、カフェ、ショップという4つの部門で、それぞれ10ずつの場所やイベントなどを、「熊本市のロングライフデザインスポット40」としてリーフレットとホームページ(<http://public.main.jp/d-kumamoto/?cat=16>)で紹介した。



写真-1 江津湖フェスタでの展示の様子

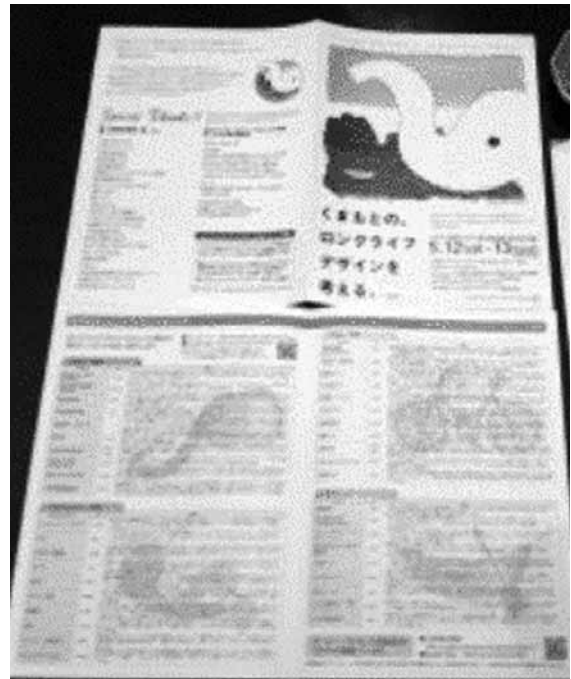


写真-2 配布したリーフレット

## (3) カフェ「cafe EZUCO」の運営

趣旨に賛同いただいた「熊本市のロングライフデザイン」のカフェやショップの商品を紹介した。



写真-3 café EZUCOの様子

#### (4) ワークショップ（雑貨や書道による）

アロマクラフトと書道を通して、自然を五感で感じる事の大切さを子供たちとその親に伝えた。ネットやテレビで視覚情報中心の世界に慣れてしまった現代の子供たちに、実際にその場に行かないと体験できないものが沢山あることを子供達に伝えていくもの。

また、一般の方の参加はなかったものの、フェスタ会場内で、江津湖の老舗ボートハウス（宮本ボートハウス）のボート2艘をペインティングした。江津湖の魅力を感じてもらうのに、ボートはとても効果的であるため、そのボートをおしゃれにデザインすることで、若者にもっとボートに興味を持ってもらうことを目的とした。このボートには、宮本ボートハウスで実際に乗ることができる。



写真-4 作成した作品の例



写真-5 ペインティングしたボート

#### (5) 竹のブランコ

動植物園の南門から外にでると、江津湖の素晴らしい風景が広がっているのにもかかわらず、熊本市民への認知度が低い。そこで、動植物園から湖畔に出て「江津湖」を満喫してもらうために、門の外に竹の大ブランコを設置した。湖に向かって飛び出すようなブランコで、子どもだけでなく大人にも江津湖の魅力を変えて印象づけた。



写真-6 竹ブランコに人が集う



写真-7 竹ブランコに乗る熊本市長

## 4. 調査内容

### (1) アンケート調査

江津湖フェスタ実施期間中、ネットアンケートによる調査を実施した。回答数206件。今回の政策提案に関係する項目の調査結果は以下のとおり。

- a) 江津湖に来る目的：休憩や家族レジャーなどが多く、“市民の憩いの場”として利用されている。次いでウォーキング・ジョギングの割合も高く、現在の健康増進の傾向に沿って、“健康づくりの場”としての利用も進んでいる。
- b) 江津湖の魅力：美しい景観や安らぎ感、都市内の豊かな自然、水のきれいさなどが多く選ばれており、まとめると市民は“都市内の豊かな自然のある景観”が江津湖の魅力だと考えていると言える。
- c) 江津湖の理想像：癒しのスポットという選択肢が回答の40%以上を占めており、上記の回答などを踏まえると、市民の理想とする江津湖の姿は「都市内の豊かな自然を基盤とした癒しの空間」ということだと言える。
- d) 理想像を実現するためのアイデア：多くの市民が、江津湖に対する思いを持っていることが理解できた。しかし、その方向性は非常に多様である。例えば、観光や人が集まるようにして欲しいという意見がある一方、何もしない、もしくは人の出入を制限することで、環境を保護すべきであるという意見もあった。

### (2) 関係者インタビュー調査

#### a) 江津湖の管理を管轄する熊本市河川公園課へのインタビュー

江津湖の魅力は、中心市街地に近いところにある湧水地としての希少性とその豊かな自然環境。なお、江津湖と言っても広く、憩いだったり催しだったり、環境保護だったり、地区毎に求められているものは異なる。

現在の江津湖の自然環境を保護することが必要。昭和35年に砂取地区が都市計画上で公園として設定されて以来、少しずつ公園区域を広げてきており、それは生活圏内に接している江津湖の環境が悪化してきたことに対して、市としてそれを守ろうとする態度のあらわれではないか。

江津湖は市民の居住地に隣接しており、まず市民の生活を守る必要がある。また、江津湖に対して何か手を入れるのであれば、江津湖の保護に取り組んできた方々を中心とする地域の思いを汲み取る必要がある。なお、江津湖自体の管理は河川公園課だが、公園内の建造物の管理は土木センターになり、管轄が分かれている。

平成24年4月から江津湖の管理は、指定管理者が一体的に行っており、基本的には指定管理者が頑張ってくれていると考えている。河川公園課としては、施設の改修などを順次行い、市民に利用しやすいようにしていきたいと考えている。なお、熊本市の政令指定都市移行に向けて、平成24年1月に、「水前寺・江津湖公園協議会」という会が発足した。地元の自治会、漁協など21名で構成されており、江津湖をどの様にして活性化するかを年に1-2回のペースで協議している。江津湖について重要なことは、ここに図っていく必要があると考えている。

#### b) 江津湖の指定管理を受託している指定管理者へのインタビュー

江津湖は、現在都市公園としての指定を受けているが、環境としては自然公園の指



定を受ける価値も十分にあり、全国的に見ても、その双方を兼ね備える湖はなかなか見当たらない。また、湧水公園としても全国的に見て類を見ない規模。

指定管理を受託するにあたって、その方針を「水と緑のわくわくオアシス ～自然と文化の宝湖を もっと身近に もっと楽しく～」としており、江津湖の理想像をその中で表現していると考えている。

指定管理者としては、満足できる管理運営を行うには、管理料がいくらあっても足りないところが辛い。しかしそこは江津湖を愛する市民との協働の中で、また造園業者との関係の中で、できる限りの管理運営をしている。ただ、市民に親しみを持ってもらおうと自主事業を始めたが、まだ運営に手一杯で、広報がなかなかできていない部分がある。また、市民にもっと身近な公園になるためには、交通状況の改善が必要だと考えている。特に、これから先を見据えて、車ではなく公共交通機関での来園を促す仕組みづくりが必要だと考えている。

また、10月6日・7日には、自主事業としての江津湖まつり「みなも祭り」の開催を予定している。この中で、市内カフェ有志による江津湖マーケットなど様々な催しを開催するが、特に「竹あかり」を、熊本城域の「みずあかり」と同日開催することを意識しており、今後の連携を図りたいと考えている。

## 5. 江津湖に関する各種調査結果を踏まえた分析

江津湖が公園として整備されるにあたって、環境共生型都市計画として「市民永久の憩楽保存地」という考えによったことは、江津湖の環境的な状況から見ても適切な判断であり、今回の市民アンケート結果を見ても、江津湖が市民の憩いの場としての認識を持たれていることから、その方向性は今も通じるものだと言える。

しかし、江津湖の成り立ちから分かるとおり、古くは奈良時代から熊本のまちづくりの中心地であったように、憩いの場である一方で、人間の生活と密着していることは確かであり、江津湖を熊本市の資源として生かすデザインを考えるにあたり、そこに暮らす人々の生活を妨げないよう配慮する必要がある。

また、江津湖の多様な生態系は、他の地域から比べればいまだに誇るべき素晴らしいものであるが、その生態系の維持にはたゆまぬ努力が必要な状況である。

そうした複雑に絡み合う江津湖の現状を、市民も感じ取っているためか、アンケート結果でも江津湖に対する多様な方向性と意見が溢れている。こうした状況において、市民の意見をすべて拾い上げ、江津湖に対して急進的に方向性を持たせることは、ふさわしくないと考える。

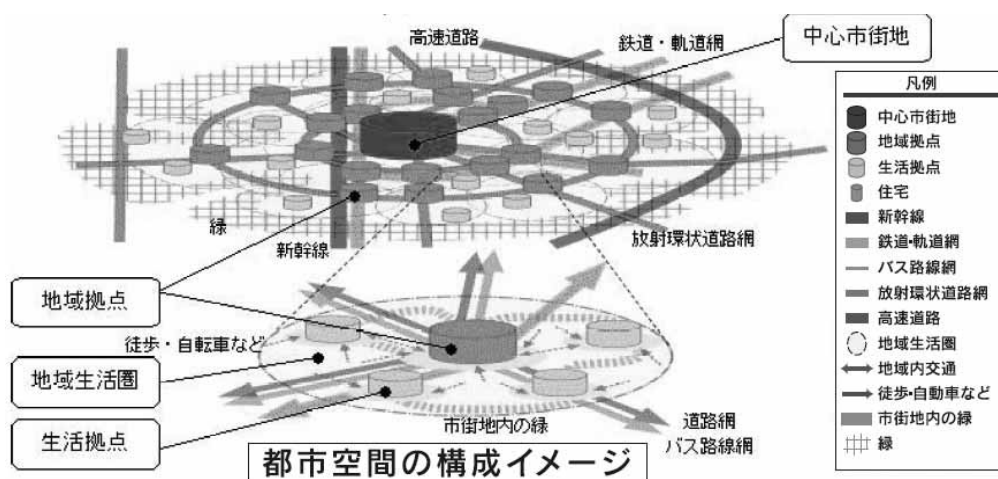
以上の点を踏まえて、我々は、まずは熊本市民に江津湖に足を運んでもらうことの促進を提案する。江津湖自体は既に素晴らしい環境を熊本市民に与え続けているが、市民を呼び込むデザインが不足している事は否めない。江津湖への人の流れをデザインし、体感する市民の数をより増やすことにより、自ずと江津湖の評価が上がっていくはずである。次に、江津湖の豊かな自然の中でこそできるような、市民の人間性が向上する仕掛けを恒常的に行うことで、江津湖の環境について考える人が増え、「人が集まれば集まるほど魅力の増す江津湖」が実現可能なのではないかと考える。

江津湖への人の流れをデザインするにあたり、まず我々が注目したのは、江津湖の指定

管理者が課題としてあげていた交通事情である。現在、江津湖に来る交通手段は、基本的に自家用車である。しかし駐車場には限りがあるし、広木地区のような整備されている駐車場を除いて、多くの市民にとって駐車場はかなりわかりにくい。一方で、駐車場を整備するには、江津湖の環境や近隣の住民に与える影響も考慮する必要がある。現状、江津湖という自然環境に現在以上の人の流れを作るのであれば、指定管理者が提言したとおり、自然に優しい公共交通機関の利用が望ましい。

ここで、熊本市の都市政策を確認する。熊本市では、市の政策の根本的な柱となる第6次総合計画の中で、都市整備の方針として、“多核連携型”の都市空間の構成イメージを描いている。その説明は下記のように記載されている。

「広域交流拠点都市として、また、将来においても暮らしやすい都市の実現のため、うるおいある自然の中で、市域及び都市圏全体の拠点である商業、業務、文化など、様々な機能が集積する中心市街地と行政・商業など生活サービス機能が充実した地域拠点や生活拠点で構成する複数の地域生活圏の形成を図ります。そして、地域拠点と中心市街地は、利便性の高い鉄軌道やバスなどの公共交通で結ばれ、地域拠点相互も公共交通や幹線道路で結ばれ、地域生活圏が相互に連携した多核連携型の都市空間の構成をめざします。」



図ー2 多核連携型の都市空間の構成イメージ<sup>4)</sup>

上記の中で、“地域拠点と中心市街地は、利便性の高い鉄軌道やバスなどの公共交通で結ばれ”とあるが、中心市街地と水前寺江津湖公園の関係は、まさにそのような関係のモデルとなりうる地域である。

さらには、平成24年2月に熊本市が提示した熊本市公共交通ランドデザインにおいて、「参画と協働で築く公共交通を軸とした多核連携のまちづくり（自動車から公共交通へ）」というテーマを掲げており、水前寺江津湖地区において、自動車から公共交通への転換を市民へのモデルとして提示することは、熊本市の方向性に合致するものである。

江津湖への交通手段が確保され人の流れができると、現在の環境が保てないのではないかと考える江津湖愛好者が多い事は、我々が実施したアンケートからもわかっている。

昨今注目されている公園の運営として、市民参加型のパークマネージメントがある。その代表的な公園の一つが兵庫県の有馬富士公園である。有馬富士公園では、県民・市民が



主役となる公園運営をめざしており、それを「ありまふじ夢プログラム」として、住民グループなどによる手作りのプログラムや、身近な自然を生かしたプログラムを、有馬富士公園を舞台に展開している。その事業では、公園を愛する県民・市民がホストとなって公園の管理者とともに、教育的なワークショップをしたり、自然環境を調べ保全する活動をしたり、公園を整備したり、将来のことを語り合ったりするワークショップなどを行っている。そのことによって、今までにないコミュニティが生まれ、公園が生き生きと成長することをめざしている。

この取り組みの成果として、有馬富士公園の年間来園者数が開園時よりも増えていることがあげられている。2001年に開園した当時は年間約40万人だった来園者数は、5年後には70万人を超えるようになった。ディズニールランドでも開園時の入場者数が最も多く、徐々に減って、アトラクションを新しくすると少し増えてまた減るといった曲線を描く。ところが有馬富士公園の場合は徐々に増えている。その理由が、この「ありまふじ夢プログラム」にあると考えられている。

ここで活動する市民などの集まりからなる各コミュニティによるプログラムの実施回数は、初年度は延べ約100回だったが、8年後には700回以上となった。当初慣れていないコミュニティでも、継続するうちに慣れてきて実施頻度が上がり、そのたびに各コミュニティのファンが公園を訪れることになる。そこからさらにコミュニティの数が増えると、さらに来園者が増える、という好循環になっている。開園10周年には、50以上のコミュニティが協力して、公園を楽しい場所になっている<sup>5)</sup>。

この公園のようなコミュニティのデザインを、江津湖らしくモディファイして行うことで、人が集まれば集まるほど、江津湖への理解が深まり、環境が改善され、そしてひとつづくりが自然とできていく可能性があると考えられる。実際に、江津湖フェスタにおいて様々な団体が事業を展開したという実績もあり、当団体においても、様々なワークショップやロングライフデザインの紹介、竹のブランコなど、デザインの面から啓発的な活動を行っており、江津湖におけるひとつづくりの場としての可能性は十分あると考えている。

## 6. 提案政策とその効果

以上のような分析を踏まえて、今回の政策提案では、まず中心市街地と水前寺江津湖地区の公共交通機関の利用促進策を打ち出す。

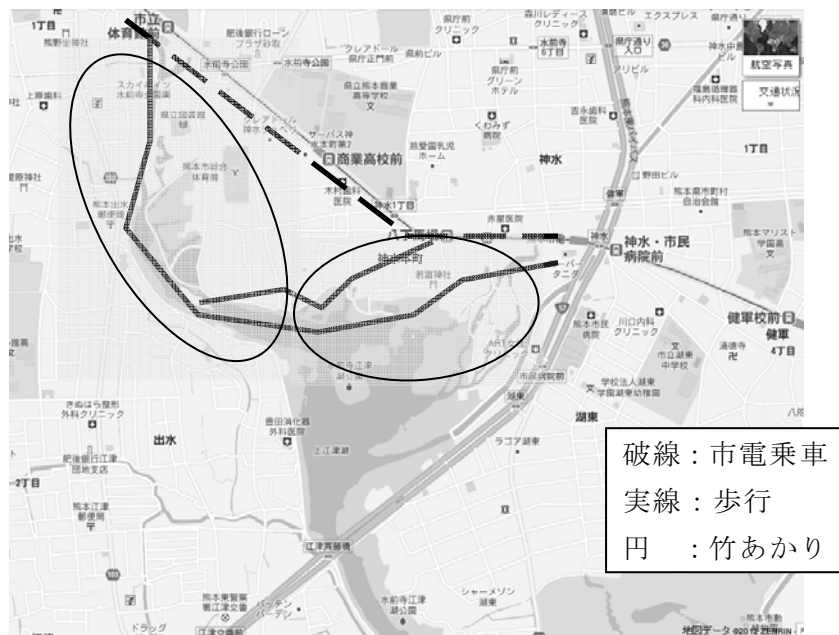
具体的には、指定管理者が自主事業として今年度から実施するみなも祭りと、現在熊本城域で開催されているみずあかりの開催期間中の市電利用を無料化することで、中心市街地と地域拠点間の移動を公共交通機関で行うことを促進し、熊本市の考える都市空間のイメージや自動車から公共交通へというイメージを、市民と共有するモデルケースとすることである。

市電の無料運行については、今年（平成24年）4月に行われた「くまもと城下まつり2012」において、市電の終日無料運行が行われており、実現可能性も高い。

状況的には、みずあかりを見た市民や観光客が、熊本城周辺を散策するだけで終わるのではなく、花畑町や熊本市役所・熊本城前の電停から市電に乗り、市立体育館前や八町馬場で下車して、竹あかりが並ぶ上江津湖沿いの道を散策し、再び八丁馬場や神水・市民

病院前で市電に乗り、中心市街地に戻るといったコースの設定になる。

これによって、熊本城周辺だけを見てイベントが終わるのではなく、広域的な展開をすることで、市民も観光客も相乗的にイベントを楽しむことができる。特に観光客にとっては、広域になって時間を要するようになると、宿泊率も高まるのではないだろうか。そして、中心市街地と地域拠点を公共交通で往復することで、熊本市の描く都市空間イメージを体感できるのではないだろうか。



図ー3 イベント時の水前寺江津湖周辺状況イメージ

上記の事業を実現するためには、現在広木地区のみで開催されている「みなも祭」を、江津湖全体で実施する方向性が望ましく、指定管理者もその方向で検討中ということであった。

そこで、「みなも祭り」の際には、市民などによるコミュニティ事業の開催を募り、江津湖一体で、それぞれの地区に則した、例えば環境保護や、生物観察、健康づくり、歴史探索といったワークショップを幅広く開催し、人が集まる仕組みづくりを行うことを我々は提案する。

すでに当団体には、江津湖フェスタにおいて、地元企業から協賛を受けたり、ワークショップの経費を参加費で賄ったりすることで、行政に頼ることなく自前でワークショップを開催した実績があり、有馬富士公園のようなプログラムを実施することの実現可能性は高く、当団体の幅広い人脈の中で、コミュニティを広げていくことも十分可能である。指定管理者との協力関係の中で、市民のできることを、または市民にしかできないことをやることができる。

## 7. 将来ビジョン

提案理由にも述べたように、人間性の向上が求められる時代にあって、江津湖のような都市内の優れた自然の存在は、とても重要なものである。江津湖という場所で、自然に触

れながら人と人の繋がりが生まれ、ひとづくりがなされることは、江津湖に対する市民の意識の向上にも必ず寄与するものと考え。その結果、在来種保護の活動の高まりの中で、様々な在来種生物の生息域も広がり、より豊かな生物環境を取り戻すことができるものと考え。さらには、江津湖を通じて地下水の保全意識が高まり、節水はもちろん、地下水の源である阿蘇山の自然や中流水域の水田の保全にも、今以上に市民の目が向いていくものと考え。

これらの事を現実化するためには、仕掛けをする側の意図がわかりやすく伝わるデザインが必要であり、良いデザインが施されることにより、市民に意思が浸透していくものと考え。

特に阿蘇山は、熊本のみならず、北部九州全体の水系に影響を与えるものであり、熊本の取り組みが九州全体をリードしていくものとして、熊本の存在力をさらに高めることに繋がるのではないだろうか。

## 8. 課題や限界

将来ビジョンを現実にするためには、短期間のイベントとしてコミュニティデザインのプロジェクトを展開するのではなく、有馬富士公園のように恒常的に開催するものにする必要がある。その中でこそ、祭りやその際の市電の無料運行が本当の意味で生きたものになると考える。

現状では、公園管理の側面から見ても、市民のできる範囲から見ても、年中開催することは無理があるように感じられる。しかし、本提案のように期間限定の事業であっても、継続して積み重ねていくことで、理解が深まり、可能性が広がるものと考え。

### 【参考文献】

- 1) 「熊本学のスヌメ第8節 熊本の大都市と都市自然」 蓑茂壽太郎著一部抜粋 熊本県立大学, 2009年
- 2) 肥後銀行「水の気持ち くまもとの水たち」, 1995年
- 3) 「江津湖の自然」 熊本生物研究所発行
- 4) 熊本市第6次総合計画
- 5) 学芸出版社「コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる」 山崎 亮 著, 2011年